18
未満
TS勇者クリス
魔物ファックで隷属産卵
黒井鶏
挿絵／umiHAL
試し読み版
二次元ドリームノベルズ

登場人物紹介

クリス

邪悪はびこる世界を正すために
大いなる使命を背負った、
由緒正しき勇者一族の男性。
しかし魔王との戦いの最中、
隙を突いた人狼ヴォルログに射られた
吹き矢の眠り薬で昏倒。
魔王の仔を孕むための孕み袋として
女体化させられてしまう。
勇者としての使命を第一に生きてきたため
性的な事柄への知識はほぼ皆無。

Contents

一章 ◉ 勇者現れる
004

二章 ◉ 勇者変えられる
012

三章 ◉ 勇者犯される
046

四章 ◉ 勇者壊される
069

五章 ◉ 勇者堕とされる
105

ヴェイガー

魔王。
次代の魔王の母体とするため、
クリスを女体化し孕み袋にする。

ヴォルログ

賢狼と呼ばれている人狼。
クリスの宿敵。

一章　勇者現れる

――世界は闇に包まれていた。

人ではない、異形の魔物が跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）し、平穏に生きている村々を、盗賊のように襲撃しては、立ち向かう者を殺し、女子供を嬲（なぶ）り犯し、資源金品を奪い取っていく。

ほとんどの人々は魔物に対抗する術などなく、嵐のようにやってきた魔物たちに今まで築き上げた平和な暮らしや財産、そして人々を無残にも破壊され、無遠慮に奪い去られる。

この世に回復や修復の魔法はあれど、それを扱うには卓越した知識や膨大な魔力が必要で、小さな、それも襲撃され何も残っていない村々には到底手の出ない代物だった。

人々は――襲い来る恐怖を打ち破ってくれる存在を、築き上げてきた平穏を守護してくれる存在を――勇者を、心から望んでいた。

※　※　※

ガコンッ！　ギ、ギ、ギィーッ……

重厚な鉄が、重苦しい音を上げて左右に割れていく。それは大きな鉄扉であった。
並の人間には動かすことも難しいだろう大鉄扉を、両腕の筋肉を目いっぱい使って割り開いたのは、扉の半分の大きさもない存在――たった一人の人間だ。
薄いが的確に身を守ることができる鎧をまとった身体は、飾りのない無駄を削ぎ落としたしなやかな筋肉に覆われていた。剣を構える姿には一分の隙も油断もない。
扉が開いてから一歩一歩歩みを進めるその姿にも、確かな矜持（きょうじ）と確固たる信念がありありと見て取れる――悪を打ち倒し、この世界に平和をもたらさんとする決意が。
ゴゴゴゴ……
開け放たれた鉄扉が、支えを失って閉じていく。ゴウン、という重い音と共に扉が完全に閉まっても、男はその歩みを止めることはない。
ただ、ただ前に――正面で静かに鎮座している、魔物たちを統べる魔王のもとへ。
「弱き者を虐げる魔王ヴェイガー！　今こそ決着の時だ！」
完全に閉ざされた空間に、芯の通った明朗で真っ直ぐな声が響き渡る。
その声にこたえるように、部屋の奥で豪奢な椅子に座する、濃紺のローブを深くかぶった「何か」が、男の方へと鋭い視線を向けた。
「――魔王の城に立ち入るとは……貴様、一体何奴だ」

そう静かに言ったはずにもかかわらず、男のまとう外套を揺らすほどの大音声（だいおんじょう）が響き渡る。しかしそれに恐れ一つ見せず、男は負けじと声を張り上げた。

「――我が名はクリス！　お前を打ち倒し、この世界に平和を導く者だ！」

そう、彼が、彼こそが――邪悪はびこる世界を正さんと、大いなる天命を背負い、たった一人で立ち上がった男――すなわち、勇者であった。

勇者――世界を危機に陥れる魔王を倒すことを使命として育てられ、成人する頃に魔王を打倒するべく旅に出て討伐する、人類の希望であり、正義の断罪者であった。

首には由緒正しき勇者であることを誇示するかのように、魔を拒むよう聖別された勇者のエンブレムが、ネックレスとして下がっている。

勇者の一族であったクリスの家系は、クリスを勇者たらんとして育て上げ、旅に出させた。全ては諸悪の根源である今世の魔王、ヴェイガーを滅ぼさんがため！

「ハハハ……いわゆる勇者という者か……」

――だが天敵であるはずの勇者を目の前にしても、魔王の余裕は一切揺るがない。

「フン！　哀れな人間め！　人の身で我を討とうなどと、片腹痛いわ！」

その大きさからは予想もつかないほど、いとも容易（たやす）く、ふわり、とヴェイガーの姿が宙に浮いた。魔王の操る魔法の力だろうか。そのまま静かにクリスの前へと立ち降りた。

「――その身の程を知るがいい！」
魔法によるものであろうか、ヴェイガーの周囲に光球が生み出される。戦闘態勢だ。
「身の程を知るのはお前だ……ヴェイガー！」
地位や金では従わぬ魔物どもを統べるということは、つまり魔物たちの中でも最も強いということ――だが勇者たらんと育てられたクリスに、恐れや不安はない。
「――ゼヤアァァッ！」
クリスは剣を構え、低い姿勢で魔王に向かって一気にダッシュし距離を詰める。
「フンッ！」
それを押し止めんと、魔王の一声と共に、光球が複雑な軌跡を描きながらクリスのもとへ殺到する。だがそれを左右に動いて鋭く回避し、クリスは強烈な剣の一撃を叩き込む！
「ハアァァッ！」「甘いッ！」
だがその一撃は宙に浮いた魔王にゆらりと躱(かわ)され、またも素早く生み出された光球が、飛び込んだクリスめがけて放たれる。
「っく……！」
クリスは体勢を整えたかと思うと、飛んできた光球を一つ一つ剣の一閃ではじき返す。逸れた光球は壁や床に触れ音を立て爆発した。当たれば浅くない傷を負うだろう。

「フッ！」
クリスは全ての攻撃をはじき返したのを瞬時に確認してから、まず一度距離をとるために、足のばねを使って素早く後ろに飛びのいた。
「はっ、はっ、はっ……」「――――――」
距離を開けても油断することなく、警戒しながら強者二人は呼吸を整える。
――並の剣士であれば、並の魔法使いであれば、今の一瞬で決着がついていただろう。だが片や魔王。片や勇者。どちらにも譲れぬものがある。どちらにも敗北など許されない。
「ハァァァッ！」「フゥゥンッ！」
二人は譲れぬ思いを乗せてまたも激突する。剣閃と閃光、爆発音と喊声――二人の攻防は、永遠と錯覚してしまうほどに長く、長く続いた。
「――ぬぅっ⁉」
――それはほぼ互角の戦いだったが、勇者の気迫が勝ったか、あるいは魔王の慢心が祟ったか、魔王に一瞬の――本当に一瞬ではあったが、ヴェイガー自身にも分かってしまうほどの――致命的な隙が生まれた。
「そこだぁぁっ！」
無論、その隙を見逃すクリスではない！　クリスは体勢を立て直されないうちに、魔王

めがけて会心の一撃を叩き込もうと一気に剣を振り上げる――

プッ！

「ぐっ……!?」

だが剣を振り上げたその刹那、クリスは首筋に妙な違和感を覚えた。

――首筋に、細い針のようなものが突き刺さっている。

「な……に……!?」

それは、クリスがよく見慣れた武器――細い針に毛綿が付いた吹き矢であった。

「ケケケ……油断大敵だぜ……！」

突如響く第三者の声。だがその声はクリスが嫌というほどに聞き覚えのある声だ。

「お、お前は……まさか……っ」

既に感じている身体の異変を押して、声のした方へ素早く視線を移すと、そこにはクリスのよく見知った、狼の顔を持つ魔物がいつもの不敵な笑みを浮かべている。

「いやぁ、苦労したぜ？　戦ってる勇者サマに吹き矢を命中させるだなんてよ」

「ヴォ、ヴォルログっ……」

――『賢狼』ヴォルログ。人間と同じように二足歩行する狼に似た魔物、人狼だ。

人狼は一般的に粗暴で策などまるで用いない、まさに人の姿をした獣、といった性格な

のだが、このヴォルログといえば不意討ち闇討ち騙し討ちは当たり前という、他の人狼とは一味違う、質の悪い厄介な人狼であった。

クリスもこの厄介な人狼に幾度となく手を焼かされてきた。倒そうとすれば裏をかかれて逃げられ、休憩しようと思えばその不意を打たれ、と宿敵のような間柄であった。

――しかし、よもや。魔王との一騎打ちというこんな時に。否、世界の命運をかけた戦いだからだろうか。今回もまた、ヴォルログに不意を打たれる形となってしまった。

「ぐっ……」

クリスは振り上げた手から剣を取り落とし、そのまま落ちるように地に屈してしまう。

「ケケケ……オークもぐっすりの眠り薬を受けてもその程度とはなぁ……勇者でなんかなけりゃあ、もう眠ってたろうによぉ？」

「ひ、卑怯な……」

いくら恨み言を言った所で、既に首に刺さった針からは、強烈な睡眠成分が全身に行き渡っている。クリスはそのまま完全に崩れ落ち、地に伏した。

「う……ぐ……」

最早抗議の声を上げることもできずに、クリスは苦悶の声を上げた。

「――よくぞ務めを果たした、ヴォルログよ」

「へへーっ、魔王サマのゴ下命とあらば！　しかし危ねぇ所でしたね！」
「フン！　あの程度危機にも入らん！　事実このように勇者は地に伏しておる――我が謀り事を欠かさず、お前という策を講じた結果よ……」
魔物二体の会話が続くが、最早意識の混濁するクリスには、その会話の内容を聞き取ることすらままならなくなっていく。
「で――イツどうしや――？　この――殺――まうんで――」
「――奴を――すでない。わ――良い考えが――――」
（だ、だめだ……なにも……かんがえ、られない――）
二人の会話もクリスの耳から徐々に薄れていき、勇者は敵前で完全に意識を失いつつある――魔王は、勇者との宿命の戦いに勝利したのだ。
（父上……母上……申し訳、ありません……）
あまりにあっけない敗北に、勇者は意識を朦朧（もうろう）とさせながらも、勇者の家系に代々伝わる胸のエンブレムを、思わず手の中に握りしめてしまっていた。
（僕は――僕は――魔王、に――）
悪を打ち倒し、この世界に平穏をもたらす勇者として、長きにわたって育ててもらった両親に敗北を詫びながら、クリスは意識を完全に手放した――

二章　勇者変えられる

「う、ううっ……」

気怠さと肌寒さを不意に感じて、クリスは少しずつ眠りから覚醒していく。首に放たれた薬のせいか、身体は怠く、鉛のように重い。目をちょっと開けるのもやっとだ。

「こ、ここは……？」

クリスが重い瞼をゆっくりと開ける。久しぶりの光に一瞬目が眩んだがすぐに慣れ、今いる場所がぼんやりと把握できた。

（ここは……寝室、なのか……？）

――そこは豪奢に設えられた部屋だった。天蓋のある大きな柔らかいベッドに、ほんのりと灯る蝋燭（ろうそく）。部屋自体とベッドがあまりに広すぎるのと、照明が蝋燭だけしかないせいで詳しくは分からない。未だ夢現のまま、ぼんやりとクリスは思考する。

（生きている……しかもここは牢獄では、ない？）

すっかり自分は殺されてしまったものだと思っていたクリスは困惑した。そして冷たい牢獄ではなく、豪奢な寝室にいたことでさらに困惑した。誰かに助けられでもしたのだろ

うか？　では一体誰に？　だが魔王の城からどうやって？　疑問が次々に湧いてくる。

クリスが困惑しながらもゆっくりと起き上がり状況確認しようとした、その時だった。

『目覚めたか？　愚かしくも屈強なる勇者よ――』

突如として、どこからか魔王の声が聞こえてきた。

「その……声は……ヴェイガー……！」

すぐに起き上がろうとしたが、眠り薬が残っているのか痺れたように身体が動かない。

「このっ……！」

怨敵を前に身動きできないことに勇者は臍をかんだが、同時に疑問も浮かんできた。

――なぜ魔王は暢気に勇者を柔らかいベッドになど寝かせているのだろうか？

これが牢獄や断頭台ならまだしも、居心地のいいベッドに寝かせる理由などない。

「一体……何のつもりだ……？　こんな場所に……連れて来るなんて……！」

うまく舌が回らないままクリスは尋ねるが、ヴェイガーは姿を現さないまま語りだす。

『貴様は我が戦った中でも精強で逞しい勇者だ――』

「つく……それは、皮肉か……？」

『皮肉？　只の真実だとも。貴様のように我に挑んだ者は数知れないが、皆口ほどにもない者ばかりであった――勇者クリスよ。我と互角に戦ったお前を除いてはな』

他ならぬ討つべき相手からの賞賛に、クリスは苦々しい表情を浮かべた。どれだけ賞賛されようと、それに勝利しておいて白々しいにもほどがある。

『そのまま貴様を消し炭にしてもよかったが――正直、貴様を死なすのは惜しい』

「僕を、どうするつもりだ……？」

何をされてもおかしくはない――そう思いながらも、クリスは聞かずにはいられなかった。自分を殺そうとしている存在をわざわざ生かしておく理由など、そうそうない。

懐柔しようというのか、他の勇者の情報でも探ろうとしているのか――どちらにしても魔王に協力するなんてことはないとクリスは決意していた。

たとえ自分が死んでも他の――それこそ顔も知らない誰かが、この魔王を倒すかもしれない。しかし次の魔王の言葉は、クリスの陳腐な想像を遥かに超えたものだった。

『――貴様は今日より、次代の魔王の母となるのだ』

「は――？」

一瞬、ヴェイガーが何を言っているのかまるで分からなかった。僕が？　魔王の母？

「ば――馬鹿を言えッ！」

クリスは思わず叫んだ。クリスは男である。生物学的に母親にはなれないのだ。

「僕は男だぞッ！　母親になんてなれるわけがないッ！」

『否、否……お前は魔王の仔を産む――いいや、魔王の仔を孕むのだ』
「は、はぁっ……!?」
生物の根幹を揺るがす言葉に、思わずクリスは声を荒らげるどころか戸惑ってしまう。
――男である僕が？　勇者である僕が？　魔王の仔を？　孕む……？
「は……ハハハハハ！」
勇者は愚かな魔王の宣告に、大きな声で笑った。その宣告があまりに荒唐無稽で、理不尽であったからだ。どうせ冗談だろうと、クリスは売り言葉に買い言葉で啖呵を切る。
「何が仔を孕むだ……この僕を……勇者クリスを、孕ませるなら孕ませてみろッ！」
『ハハハ……』
声を荒らげた勇者に、魔王は嘲笑の声を上げた。
『まだ目が覚めきってはいないようだな……自分の姿をよく見るがいい……！』
「自分の姿だと……？　ああ！　見てやるとも！」
敵対する魔王にそんな風に言われた所で、まず信じることはできない。クリスは横たえた身体に掛けられた薄布を乱暴にはぎ取って、その嘘を暴こうとした。
「なっ――!?」
布の覆いが取れ、自分の身体が露わになった瞬間、クリスは思わず言葉を失った。

――ベッドの上の自分の身体は、一糸まとわぬ裸であったが、その裸は全く見慣れない裸であった。骨格は小さく、肉付きは筋肉が少なくふっくらと柔らかい。胸元は筋肉ではない柔らかな丸肉が二つ、重力に従いふるんと潰れている。

そして極めつけは股間――いつもそこにあるはずの男性の象徴は忽然と姿を消していた。その代わりと言わんばかりに、楚々と茂る薄い若柴だけがそこにあったのである。

「な、なんだ、これは……？」

なぜ今まで気が付かなかったのか、思わずそう呟いた声も言われてみれば男のそれではなく、凛とした少女のそれになっていた――そう、屈強な男だったはずのクリスの肉体は、真逆の華奢な女体へと完全に変化を遂げてしまっていたのである。

「一体、どうしてこんなことが……！」

一瞬、魔法によって意識だけ他人の少女に移されたのか、とも考えたが、悪しき者には触ることもできない一族伝承のネックレスが、胸の谷間に所在なげにあった。

（――まさか、本当に女の身体に――？）

『魔王である我の魔法に不可能などない』

戸惑うクリスの心を読んだかのように、魔王は勝ち誇りつつ断言した。

（くっ……理屈は分からないが、ヴェイガーが僕を女の身体にしたのは間違いないらしい

オークだって性欲がないどころか、ゴブリンの性質を受け継ぎ、精力旺盛そのもの。目の前で発情した雌が、自分に淫らな奉仕をしてくれるとなれば、滾らぬはずがなかった。

「ケケケ……ザーガットも悦んでるぜぇ……！　もっと深く咥えてやりな！」

「はむぅっ……♡　うぐっ、おぐぅっ……♡」

夢中になって奉仕を続けるクリスは、その声の主も意味も理解せずに、魔法使いに命じられた使い魔のように、忠実に指令を実行する。

だが男の腕ほどもある肉棒をすべて咥えるなどという拷問じみた行為が、初めて自分からペニスを口にした乙女にできようはずもなく、当然途中で飲み込みは止まってしまう。

「むーっ♡　うぅーっ♡　むふぅーっ♡　うぅふぅーっ♡」

（ふあぁぁっ……♡　においもっ♡　あじもっ♡　きっ、きもちわるいのにぃっ……♡）

呼吸すらままならないはずなのに。匂いも味も不快なはずなのに。心では、何が何でも拒みたいはずなのに――淫紋が絶えず光を放つこの身体は、狂おしいほど悶え狂う。

（欲しい）（味わいたい）（もっと奥まで）（もっと！）（もっと、ほしいっ……♡）

（ダメだ）（不快極まる）（吐き出さねば）（いやだ！）（もう、いらないっ……♡）

肉体が本能的に渇望すれば、精神が理性的に忌諱する。脳内で駆け巡る、相反する二つ

の思考は、淫紋の疼きによって、両方ともどろどろに溶かし崩されていく。
最早クリス自身ではこれ以上の進退を決めかねていた、そんな時だった。
「――ゴガァァッ！」
「んごぉぅっ⁉　ごぐっ、うぐぇっ……ごぼうっ、ごがっ、おげぇぇっ……！」
いつまで経っても射精へ至れる刺激がやってこないせいで、ザーガットは我慢が利かなくなったのだろう。クリスの頭を強引に掴んで、腰を使い始めたのだ。
自分の許容できる範囲を超えて、喉奥へと一気に肉塊を押し込まれたせいで、惚けていたクリスの脳内が一瞬で、不快極まる嘔吐感に満たされてしまう。
「うごおっ……ふっぐぅ、うううっ、おごぉぉっ……！」
（さ、裂けるっ……壊されるっ……！）
拳並みの大きさの先端が、食道の直前にまで侵入してしまっている。だというのに、目の前にはまだ肘から先ほどの長さのある陰茎が控えているのだ。
このまま相手の欲望のままに振る舞われてしまえば、自分の頭部は破壊されてしまうことだろう。相手はオークだ、相手を慮れるほど知能があるとは思えない――
吐き気が蕩けかけた思考を一気に覚まし、クリスはすっかり冷静さを取り戻していた。
（なんてことだっ……あんな事に夢中になってしまうだなんて……！）

あんな風にはしたなく求めてしまったことを猛省するも、既に手遅れの感がある。
――ペニスで、殺される。これ以上ぶち込まれてしまえば、上顎と下顎が完全に分離してしまう。あまりに無様な最期を想像してクリスは自分の意志の弱さに自身で幻滅する。
「うぐぐっ……！　おえっ、っっぶぇぇ……!?」
だが、そのままペニスが突き込まれることはなく、喉元から引き抜かれていく感触をクリスは感じていた。
（た、助かったの――ごぁっ!?）
しかし安心したのもつかの間、そのまま同じようにペニスは奥まで強引に喉を蹂躙し、また戻り。そしてまた喉を陵辱し――ザーガットは喉奥へピストン運動を開始したのだ。
ずぼぼっ……ろるるっ……ごぼぼっ……おぼぼっ……ぼぶぶっ……ぬろろっ……
「おっ、おごごっ！　ふごおっ……んぼぉっ、げぇっ！　ぶぼぼぉ……！」
クリスはゆっくりとだが、何度も何度も、圧倒的熱量と質量を誇る雄槍に喉を蹂躙され、涙目になりながら嘔吐欲求と戦っていた。
しかしオークの方はそんなことなど意にも介さず欲望の赴くままに、力強く後頭部を押さえつけながら、ペニスに押し付けるように少女の顔を前後させている。
クリスは口端から防衛反応として湧き出てくる涎と悲鳴を、巨根で塞がれた隙間からだ

らだらと零してしまっていた。
ずぶぶっ、ぞぶぶっ、ぐぶぶっ、ぬぶぶっ、じゅぶぶっ――
「うげぇっ……ぐっ、うぐぅっ、んぐぅぅっ……！」
（い、息がっ……苦、しぃっ……！）
しばらくの間、鼻から息をするのも忘れて、口腔内の不快感と苦痛を耐え忍んでいたクリスだったが、その苦役も終わりの時が近づいてきた。
「んぐっっ……！　ううっ！　むぅぅっ！」
口の中の剛直が、突然口の中をビクビクと跳ね回り始めたのだ。その感触は膣内と口内の違いはあれど、明らかにフィニッシュ――射精直前の男根の動きであった。
（しゃ、射精するのかっ……今の状態でっ⁉）
呼吸ももう限界。今にも吐いてしまいそうなこの時に、このまま喉元で射精などされたら――クリスは脈動を感じながら、すぐにやってくるだろう白濁の衝撃に涙目で備える。
「グオォォッ……！　グウッ！　グオォォッ……！」
どぼっ、びゅびゅびゅぅっ！　びゅぐっ！　べびゅっ！　どびゅっ、びゅぐんっ！
ザーガットがくぐもったうなり声を上げたと思った刹那、まるで火山が噴火するように、夥しい量の精液が喉奥めがけて斉射された。

「んぶおっ……ごぼっ！　ぐえっ！　うごぇっ！　おごっ、ごぼっ……！」
脈動一つごとに常人の一射精分の精を吐き出しながら、勃起はなおも猛々しく脈動し続ける。喉元に粘つく異味異臭の熱液を直に流し込まれれば、当然たまったものではない。
「ぐぇっ――っぶえぇっ！　ごえぇっ！　うぇぇっ！　げっほ、げっほ……うえぇっ！」
射精して一瞬呆けたオークの腕力が緩んだこともあってか、思わず咳き込んだクリスはペニスを勢いよく吐き出し、そのまま手の拘束から逃れ、盛大に白い嘔吐を繰り返した。
「おえぇっ！　っぺ！　うげぇっ、おげぇっ！　げぇっ……おえぇぇっぷ！」
精液だまりの中で、喉奥から絞り出すようにたった今出された精液を吐き出すクリス。しかしそんな事知ったことではないと言わんばかりに、口内から解放されても未だ勢いよく射精し続ける屹立が、苦しみ続ける彼女へザーメンをこれでもかとまき散らす。
「うぇっ、ぶぇっ――っひ!?」
濃厚な白濁が次々にクリスの身体に降り注いでいく。
既に精液まみれだったがオークの――実をいうと初めての外的刺激によって射精された――濃厚極まる精液が肌に当たった、その瞬間だった。
「ひあっ、っあっ、んぁあぁっ♡　はぁっ♡　はぁっ♡　そっ♡　そんなぁっ……♡」
今まで苦しみながら嘔吐していたはずのクリスの口からは、あっという間に歓喜の声が

零れてしまうようになっていた。クリスが予想するまでもなく、淫紋の力である。
「はぁっ……んくっ、っふ、ふぁぁっ……♡　せ、せいえきっ♡　すごいっ……♡」
あんなに一生懸命吐き出していた精液を、クリスはいつの間にか嚥下し、恍惚の表情でその匂いと感触、何物にも代えがたい味をじっくりと味わってしまっていた。
「んじゅっ、んくっ、んんっ……♡　はぁぁっ……♡　じゅるるっ……♡」
（もっとぉ……♡　もっとあじわいたいぃ……♡　もっとふかぁいところでぇ……♡）
苦しみに満ちていたはずの表情は、あっという間に淫靡に蕩けてしまっていた。潤んだ瞳でふと視線を移すと、そのどろりと濡れた目に留まったものがあった。
「あぁっ……♡」
――今まさに射精したばかりだというのに、雄々しく肉の塔がそびえ立っている。先端からは熱く白い雫を滴らせ、裏筋を通りながら肉幹を伝って地面に落ちていく――
「はぁっ♡　はぁっ♡　はぁっ♡　はぁっ♡　あぁっ……♡」
疼く身体が、自然と汚濁を目で追わせてしまう。舌が勝手に唇を舐めさせてしまう。口がいつの間にかどんどん上下に開いていってしまう――
「はぁーっ♡　はぁーっ♡　はぁーっ♡　はっ♡　はっ♡　はっ♡　はぁっ♡」
いつの間にか腰は浮き、目の前には白濁が緩く噴き出す鈴口があった。喉が不意にごく

り、と鳴った。誰の音かと思ったら、自分の鳴らした音であったことにクリスは驚いた。
（な、なんてことだっ……まさかっ、こ、これをっ、くちにしたいだなんてぇっ……♡）
苦味や酸味や塩味では表せないその味を、舌の上で粘り気と共に感じたい。鼻へ抜けていく青臭い香りも。滑り輝くその光沢も。他の何物にも代えがたい目の前の忌むべき汚濁を、今すぐ疼く身体の中に取り込んでしまいたい――
「はぁむっ――んんんーっ♡　んふぅっ♡　うっ♡　むふぅっ♡　うぅーっ……♡」
クリスは耐えきれないといった表情で鈴口へと食らいつき、はしたなく精汁を啜る。
味を、粘りを、匂いを知覚した次の瞬間には、クリスの腰はカクカクと小刻みに揺れ、精液だまりへ向かって、媚肉から迸った愛液をぷしゅりと漏らしてしまっていた。
「ケケケ……ザーメン飲むだけでイきやがったなぁ？　このメス、スケベすぎるぜ……」
すぐそばで呆れ交じりに品評してきたヴォルログの言葉も、最早クリスには届かない。
まるで渇ききった身体を潤すように、疼ききった身体を鎮めるため、とろとろと湧き出す僅（わず）かな精を、恍惚とした表情のまま、ちゅーちゅーと吸い出していた。
「んじゅるるるっ♡　ずずぅーっ♡　んぐっ♡　んぐっ♡　んぐぅっ……♡」
（はぁぁっ……♡　くさいっ♡　まずいっ♡　のみにくいっ♡　でもっ……もっとほしいっ♡　これっ♡　このっ……せいえきっ♡　せいえきもっとほしいのぉっ♡）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

健昂優良 ビビッドガール VIVID GIRL

木森山水道　挿絵：sue

淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン

スポーツ大好き女子校生の輝木ミコトは、友達以上恋人未満な関係の幼なじみ元喜一郎たちと毎日運動をしながら楽しく過ごしていた。そんなある日、スポーツを地球から奪うために現れた宇宙人、プリンス・アウターの精神支配によって、人類が無気力なスポーツ嫌い状態に陥ってしまう。唯一その支配におかれなかったミコトは変身ヒロイン、ビビッド・ガールに変身するが……。敗北したミコトを待っていたのは常識改変された淫らな体育祭！　パイズリ玉入れ、挿入ムカデ競走、セックス全員リレー。身体に刻まれた淫紋の力はミコトの正義と淡い恋心を砕いてゆく……。

各電子書籍サイトにて今春配信予定！

電子書籍限定の二次元ドリームノベルズが登場！

表紙はもちろん、描き下ろしモノクロイラストも収録！　ボリュームたっぷりでお送りします。

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル　TEL:03-3555-3431(販売)　FAX:03-3551-1208

最新情報はオフィシャルサイトへ　キルタイムコミュニケーション　検索

正義のスーパーヒーローチームが帰ってきた！

二次元ドリームノベルス

サンダークラップス！リボーン シリーズ

THUNDER CLAPSI REBORN

羽沢向一 挿絵：緑木邑

各電子書籍サイトにて
各巻好評発売中！

本誌にて好評連載中！
大人気同人ゲームの
単行本小説が
電子限定で登場!!

魔剣士リネ2

乙女穢されし戦場

原作：まくらカバーソフト
小説：酒井仁　挿絵：桐島サトシ

全3巻各電子書籍サイトにて好評発売中!

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル　TEL:03-3555-3431(販売)　FAX:03-3551-1208

最新情報はオフィシャルサイトへ　キルタイムコミュニケーション　検索